

81年度シリーズ・セミナー合同企画

## 『古代文学論の方法』についての報告

——五年間の活動の総括と今後の展望をこめて——

既に何度か、例会案内などで報告してきた通り、古代文学会編『シリーズ古代の文学』（武蔵野書院刊）は、第七巻『古代詩の表現』（82年刊行予定）で終刊とすることになった。過去五年間に渡って方法論を問い続け古代文学研究に新しい波を送ってきたと自負しているのだが、方法論を問うことの行きづまりと売れ行きの頭うちによる価格高騰という外的な出版事情とが、終刊のやむなきに至った直接的な原因であった。企画委員や会員有志の何度かの会合を経て委員会承認されたシリーズの終刊だが、それ以前から続けていたセミナー合宿の継続も同時に確認された。そして、81年度セミナー合宿はシリーズ・セミナー合同企画として、五年間の総括と今後の展望をも可能にするテーマ『古代文学論の方法』を掲げ、既に案内の通り、八月下旬、二十八名の参加を得て実施された。

今回のセミナーは、今までのシリーズ・セミナーの総括という意味合いを強くし、合わせて来年度以降の展望をも開けるようにと意図して、方法論の再検討を試みるために、発生論・様式論・制度論を柱に据えた。発生論と様式論は、過去に我々が提示してきた方法論の大きな柱であったし、制度論は、最近の古代文学研究のなかで

活発になりつつある方法論だと考えられるので、それら三つの方法論の問題点を明確にし、その有効性を確認するとともに、相互の関連についても検討を加えてゆくことを考えての企画であった。そして、企画の意図を鮮明にするために、今回は個別的な発表・討議の形態を避け、企画者の側で任意に選択した古代の作品に対する、依頼した報告者の発表と参加者の討議を、シンポジウム風に行なうことにした。三つの作品は、歌の問題を考えるために「高市皇子挽歌」（万葉集巻二）を、神話を考えるために「神統譜から国生み神話」までの記紀神話の冒頭部分を、民間伝承の諸問題を考えるために「奈具社伝承」（丹後風土記逸文）を、それぞれ選んだ。

いまでもなく、セミナー合宿は参加者だけのものではなく古代文学会全体の活動の一環としてある。今まではその成果を単行本にすることで会員諸氏への報告を兼ねていたが、今回はそれが果せないで、会誌の誌面を借りて報告する。紙幅の制限もあって、セミナーの発表・討議を完全に伝えることは不可能だが、以下に発表者の発表要旨と討議で出された問題点の幾つかを総括風に記し、シリーズ終刊の責をいささかでも塞ぎたいと思う。

（文責 三浦）